

没後50年 ドミトリ・ショスタコーヴィチを聴く 第2回

プログラム

今回は、今年没後50年に当たるソヴィエト時代を代表する20世紀最大の作曲家のひとり、**ショスタコーヴィチ**をお聴きいただく特集の、第2回目をお送りします。

1925年、18歳で音楽院作曲家卒業作品として作曲された交響曲第1番の成功により、世界の注目を集めるようになったショスタコーヴィチは、1931年にバレエ音楽「ボルト」を作曲、バレエ興業としては失敗に終わりますが、楽曲は高く評価され、後に組曲版が編曲されました。バレエ音楽や映画音楽は、ショスタコーヴィチの「別の顔」を知る上でも欠かせない作品群になっています。意欲的で斬新な新境地に踏み込んだ作品として書かれた歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」が1936年に共産党機関紙プラウダ誌上で厳しく批判されたのを機会に、社会主義リアリズム路線に歩み寄らざるを得なくなったショスタコーヴィチは、交響曲第5番ニ短調を発表し、国家の政策に協応していることを示しました。続く**交響曲第6番ロ短調**も民衆はこの路線を期待していましたが、内面的な深い構想の作品となり、一定の評価を得ることは出来ませんでした。第2次大戦終了直後に書いた新古典主義的な小交響曲、第9番変ホ長調も、戦勝とスターリン勲功を称える大曲を期待していた当局から厳しく批判され、もう一度大衆路線に歩み寄る道を選んだショスタコーヴィチは、1949年スターリンの植林政策を称えた、オラトリオ「森の歌」を作曲して名誉を挽回しました。前年の1948年には**ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調**を作曲、1967年に書かれた第2番ともども複雑で内攻的な作品で、至難の技巧が要求される難曲ですが、より変化に富んだラブソディックな第1番は、今日では盛んに演奏されるヴァイオリン協奏曲の名曲のひとつになっています。ショスタコーヴィチが生涯に渡って書き続けたのが交響曲と弦楽四重奏曲ですが、最後の交響曲第15番が1971年、最後の弦楽四重奏曲第15番が1974年に完成されています。時代に翻弄されながらも、最後には自由な作風を獲得した彼の音楽は、時代によって変化し、常に新しい自分の音楽を探し求めましたが、作風は新古典主義の範囲に収まるものでした。最後の作品となったヴィオラ・ソナタは死の1ヶ月前に完成しますが、作曲家自身は聴く事ができないまま、1975年8月9日、モスクワで68年の生涯を閉じました。

(中川)

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906~1975) :

バレエ組曲「ボルト」Op.27a (1934年版)

1. 序曲
2. 官僚の踊り (ポルカ)
3. 荷馬車引きの踊り
4. タンゴ
5. 前奏曲
6. 全員の踊りと大団円

キリル・コンドラシン指揮NHK交響楽団

(1980.1.25 NHKホールでのLive)

ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調Op.77

レオニード・コーガン (ヴァイオリン)

小澤征爾指揮ロンドン交響楽団

(1973.8.12 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

*** 休憩 ***

オラトリオ“森の歌” Op.81 から 第6曲 未来の散歩道 第7曲 栄光

アレクセイ・マスレンニコフ (テノール) / アレクサンドル・ヴェジヨールニコフ (バス)

モスクワ放送合唱団 / 荒川少年少女合唱隊

エフゲニー・スヴェトラノフ指揮ソヴィエト国立交響楽団

(1978.10.21 NHKホールでのLive)

交響曲第6番ロ短調Op.54

ロルフ・ロイター指揮バイエルン放送交響楽団

(1984.12.21 ミュンヘン、ヘルクレスサールでのLive)

曲 目 解 説

シヨスタコーヴィチ：バレエ組曲“ボルト” Op.27 (1934年版)

シヨスタコーヴィチはバレエ音楽を3作書き残しました。1930年完成の「黄金時代」、1934年完成の「明るい小川」、そして1931年完成の「ボルト」は第2作にあたります。ソヴィエトの官僚主義者たちを諷刺した内容で、3幕7場からなり、アレクサンドル・ガウク指揮のキーロフバレエ団によって、1931年4月8日、キーロフ劇場で初演されました。70年以上経った2006年に改訂振付けが行われ、ポリショイ劇場で再演されましたが、バレエ興業としては失敗に終わった作品ながら、楽曲への評価は当時から高く、1931年には全曲から8曲を抜粋し、組曲版として編曲されました。1933年1月17日にガウク指揮レニングラード・フィルによって初演されましたが、さらに1934年には6曲を抜粋した組曲版が作られました。具体的には8曲版にあった第6曲と第7曲がカットされています。今回はこの1934年版による演奏です。

1. 序曲 2. 官僚の踊り(ポルカ) 3. 荷馬車引きの踊り
4. タンゴ 5. 前奏曲 6. 全員の踊りと大団円

* ロシア出身の名指揮者キリル・コンドラシン(1914~1981)がただ一度NHK交響楽団を指揮した折の名演。

シヨスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調Op.77

シヨスタコーヴィチは、第2次世界大戦中は社会主義リアリズムの忠実な担い手でしたが、終戦と同時に新古典主義的な軽い交響曲第9番を発表すると、1948年共産党中央委員会の書記アンドレイ・ジダーノフが押し進めた“ジダーノフ批判”の対象となってしまいます。ここはオラトリオ「森の歌」を発表して名誉を回復しますが、スターリンの死後、1953年に交響曲第10番を発表すると、この曲の持つ悲劇的葛藤が不安と動揺を与えるとして、またしても“ジダーノフ批判”にさらされます。ヴァイオリン協奏曲第1番は1948年に作曲されましたが、ちょうど論争に見舞われていた時期だったことから、批判の行き過ぎが認められた、7年後の1955年にようやく発表されました。初演は1955年10月29日、この曲の献呈者ダヴィード・オイストラフの独奏とエフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルによって、レニングラードで行なわれました。交響曲第10番とヴァイオリン協奏曲第1番は悲劇的な性格と共通するテーマを持ち、交響曲第10番の第3楽章はヴァイオリン協奏曲第1番の第2楽章と同じ素材が用いられています。きわめて高度な技量と力強い表現力が要求される難曲ですが、近年演奏される機会の多いヴァイオリン協奏曲の名曲の一つです。

第1楽章 夜想曲 第2楽章 スケルツォ 第3楽章 パッサカリア 第4楽章 ブレスク

* ウクライナ出身の名ヴァイオリニストレオニード・コーガン(1924~1982)と小澤征爾(1935~2024)がザルツブルク音楽祭で共演した白熱の名演奏。

シヨスタコーヴィチ：オラトリオ“森の歌” Op.81~第6曲「未来の散歩道」/第7曲「栄光」

1945年に書かれた交響曲第9番が“ジダーノフ批判”の槍玉にあげられると、シヨスタコーヴィチは大衆路線に歩み寄る道を選び、1949年に、オラトリオ「森の歌」を作曲して名誉を回復しました。作曲するにあたり、そのためのテーマとして、シヨスタコーヴィチは当時のソヴィエトの壮大な国家事業のひとつだった、大植林による自然改造事業に着目しました。これはウクライナからカスピ海に注ぐヴォルガ河に沿って大陸を横断する広大な土地を、カスピ海東に位置するカラクム砂漠からの熱風を大妨風林を作って守り、良質な耕地と緑地に変えるという大計画でした。シヨスタコーヴィチは、詩人のエフゲニー・ドルマトフスキーに作詩を依頼し、7曲からなるオラトリオとして完成、1949年11月15日にエフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルと合唱団によって初演され、大絶賛を浴びました。スターリンを誉め称えた内容のおかげで1950年スターリン賞第一席を受賞しますが、彼自身にとっては大きな屈辱でしかありませんでした。1953年にスターリンが死去すると、スターリン独裁体制への批判が高まり、それに伴い、スターリンを賞賛する歌詞を変更することとなりました。世界的にみると、ソヴィエト連邦の崩壊と共に、共産主義政権を讃える歌詞が敬遠されるようになり、今日ではめったに演奏されることはなくなりました。しかし楽曲に対する高い評価は根強くあり、故岩城宏之氏も2005年に演奏会で取り上げた時に、音楽的価値の高さを語っているように、日本ではフェドセーエフやテミルカーノフが取り上げるなど、比較的多く演奏されています。

第1曲 戦争が終わった時 第2曲 祖国を森で覆おう 第3曲 過去の思い出 第4曲 ビオネールは植林する
第5曲 スターリングラード市民は行進する 第6曲 未来への散歩道 第7曲 栄光

* ロシア出身の名指揮者エフゲニー・スヴェトラノフ(1920~1996)来日時の名演奏。

シヨスタコーヴィチ：交響曲第6番イ短調Op.54

社会主義リアリズム路線に従って書き上げた交響曲第5番イ短調の成功によって、シヨスタコーヴィチは次もその延長にある大作として、独唱、合唱、オーケストラによる、ソヴィエトの偉大な指導者レーニンを讃える作品を考えていましたが、楽想は進展せず、その想いはやがて改められ、1939年に伝統的な4楽章構成から離れた独特のスタイルを持った交響曲第6番イ短調を発表しました。1939年11月5日にエフゲニー・ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルによって初演されましたが、大作を期待していた聴衆からの評判は、それほど良いものではありませんでした。3楽章構成で、悲劇的気分満ちた瞑想的なラルゴの第1楽章から始まり、目の覚めるような軽快なスケルツォの第2楽章、ギャロップのリズムに乗って、一見冗談音楽風に展開する第3楽章まで、シンフォニーの伝統を破って、いわば「裏をかいた」ような独創性を持った交響曲となっています。

第1楽章 ラルゴ 第2楽章 スケルツォ、アレグロ 第3楽章 プレスト

* ドイツ出身の実力指揮者ロルフ・ロイター(1926~2007)指揮による隠れた名演奏。